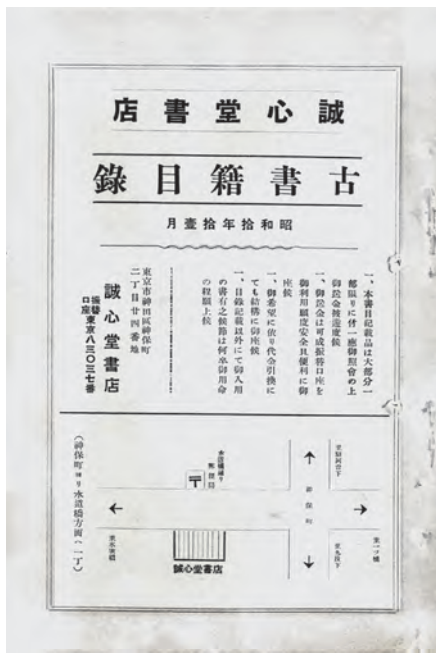


誠心堂書店の目録第一号を発見

橋口 侯之介(誠心堂書店)

おかげさまで、誠心堂書店は創業八十年を迎えた。それを記念して簡単な「書目」の小冊子を発行し、巻末に誠心堂の年表とエッセイを掲載した。ところが、この編集を終えて印刷にかかってから、思いがけない収獲があった。



八十年前の「誠心堂書店古書籍目録」である(左図はその表紙)。先代の田中十蔵が現在地に店を開いたのは昭和十年のこと。その年の十一月に早くも目録を発行していたことがわかった。その翌年四月発行の二号

目とともに古書市場に出きたのである。当時のいろいろな古書店の目録を集めていた人が誠心堂の分もいっしょに綴じてんでくれてい

た。よく保存してくれたおかげで、思わぬものを手にすることができた。実は、わたしはこの目録を初めて見た。先代からも話を聞いていなかった。その後、目録販売はしておらず、昭和四十年代に発行したことは聞いていた。それを「創刊号」だとばかり思っていた。ところが、独立間もない時期に古書目録を出していたことがわかったのだ。

私が誠心堂の勤務を始めたのは昭和五十年のことだ。当時は店売りだけで商売をしていたために二所帯分稼ぐには心許ない状態だった。できたら目録販売をして少しでも収益をあげたいと私は希望していた。それが実現したのは、昭和五十五年になってからだ。これを「復刊第一号」とした。それが現在一三二号になったわけである。

古書目録を出すには、最低でも千点以上の在庫を持つこと、千人以上の顧客のリストを用意する必要がある。目録の印刷代、送料などの経費もかかるので資金的余裕も必要である。ふつう独立開業してそこまでこぎ着けるには数年以上の経験と蓄積が必要だ。だから、私は戦前の古書目録は存在しないと思いついてきた。先代からもとくに聞いていなかった。

先代・十蔵が奉公していた山本書店の当時の主人は体が弱い人だった。それで、その分十蔵が精を出して働いた。番頭になってからは市場の仕入れもまかされるようになった。十五年働いて二十七歳で独立した。その開業半年で目録が出せたのは、番頭時代からの知識と経験がものをいっただのだろうと思う。

ちなみにその目録の巻頭部分を紹介すると(次頁上画像)、古事記、日本書紀関係の和本で始まり、宣長や篤胤の国学、日本史、源氏物語や枕草子などの国文注釈書と続くのが最初の二頁である。今の誠心堂の目録とあまり変わらない構成である。三頁以降は、「和漢三才図会 八一冊

